

# 池田大作の教育思想

—子ども・母親・父親観を中心に—

## “Daisaku Ikeda’s Thought of Education”

: Focus on view of Child, Mother and Father

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

馬 暁 宝

**Ma Siwe Poh**

はじめに

1. 研究の課題
2. 研究の目的
3. 研究の方法

### I. 池田大作の子ども論

1. 子ども観①
  - (1) 子どもの白紙説
  - (2) 桜梅桃李
  - (3) 幼児時代
2. 子ども観②
  - (1) 人間観
  - (2) 善悪の問題
  - (3) 子ども非行について

### II. 池田大作の母親論

1. 母性
2. 母親について
3. 母親の愛情の変質について
4. 「人間として生きる」よい母親について

### III. 池田大作の父親論

1. 父性
2. 父親の権威的な性質について
3. これからの父親像

おわりに

## はじめに

本研究は、これから21世紀を生命の世紀に建設していくためには、いかに大人たちは手を携えながら教育の役割を果すべきかについて研究するものとする。

創価大学を創立した池田大作（1928—、創価学会第3代会長、現在は名誉会長、以下本稿では「池田大作」と略記する）を語るときに見落としてはならないのは「生命」についての洞察である。池田大作は、生命に対して関心を持ち始めたのが少年時代にかかった重い病気ということである。

健康な体に恵まれなかった池田大作は、第二次世界大戦（1939—1945）の悲惨さにも自分の青少年時代を犠牲しなければならなかった一人である。そこで、“大義”という名のもとで武器を用いて人間を殺したり、人間に殺されたりする残酷さを目の当たりにした池田大作は、戦争を憎み始めた。

当時の政府は“戦争へ”の国民の協力を得たとして、教育を悪利用した。そこでは工場で武器を作る母親と戦場で戦う父親姿を借りて、戦争を賛美し、国のために戦える自分にもなれと、戦争への誇りという幻想的な考え方を持たせたのである。そのために、国家権力者は学校を軍隊“基地”のような建築に造り上げた。

それ故に、戦争は絶対に二度と繰り返させないと心に誓った池田大作は、戦争の時代から平和の時代へと変革するには教育しかないと考えた。そのような折、戦後まもない、1947年8月14日に、創価学会のある座談会で戸田城聖（1900—1958、創価学会第2代会長、以下本稿では「戸田城聖」と略記する）に出会ったのである。

教育によって戦争をもたらされた。だから、平和の建設も教育で成功させないわけにはいかないのである。それ故に、教育は戦争という悪の方向にでも、平和という善の方向にも導くことができるために、戸田城聖が言われた「生命の尊厳」に基づく教育しか平和を実現することができないのである。戦争が勃発したのは、生命を軽視したからに違いないである。

池田大作は17歳で敗戦を迎えた。それ以前から、戦争が“日常”だった時代に過ごした少年期の心に平和への熱望が根付いた。そこから、師匠から「生命の尊厳」という日蓮仏法の根本精神を受け継ぎ、「この地上から悲惨の二字をなくしたい」という師匠の悲願を自分の使命として戦争なき新世紀を築いてゆく人生旅が始まった。

### 1. 研究の課題

戦争以来60余年、21世紀に入ってから7年目を迎えた今日を振り返ると、人類が抱えた問題がまだ山積している。国内・国際紛争が相次ぎ、核保有・核開発などによる悲惨な末路をもたらしつつある歴史を無意識に繰り返しているのではないだろうか。

それ故に、現代における人間の活動からもたらされた諸問題の根本原因は、人間の生命内に秘めら

れている傲慢さである。その意味においては、環境の改善よりも、個人の内面の改善をまずしなければならぬのである。その根本とは、いわゆる上述した「生命の尊厳」に他ならないのである。

創立した東京・関西の創価学園に対して、池田大作は5つの原則<sup>1</sup>を提言した。その中の一つは「生命の尊厳」である。しかも、第一項目に定めた。創立者が創価女子中学校・高等学校第1回入学式のスピーチの中で述べられた「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない」という言葉は学園の児童・生徒の指針となった。池田大作は、生命をどれほど大事にしているのかが分かる。

一方、子どもという存在を大切にしていない今日、子どもによる痛ましい事件<sup>2</sup>は次々と起きている。このような事件を生み出している背景に、経済偏重へと進む日本の社会構造が見え隠れする。実際に、この経済偏重に溺れた拝金主義の傾向が強い社会になった現代において、社会的地位や学歴や名声という基準によって、豊かな暮らしを求めてばかりいるという大人の特定の考え方が最も恐ろしいのである。「豊かな暮らし」とは何なのか。自分の子どもをよく養えない家庭において真の「豊かさ」があるのだろうか。「いじめる子がいるから」「勉強が好きではないから」「学校になじまないから」という理由で、登校が嫌いという児童・生徒が増え続けていることが、「豊かさ」と言えるのだろうか。

## 2. 研究の目的

周知のように、昨今における様々な子どもによる痛ましい事件の原因には、家庭教育や教師の指導力不足などがある。特に、2003年に経済協力開発機構（OECD）が行った国際学習到達度調査（PISA）で読解力や文章表現力などの学力低下が明らかになったことを受け、国内での学力調査の実施が決まった。この学力低下という問題で教師の責任は厳しく問われ始めた。

ところが、親と教師の責任を責めた人々は、親と教師の生活の様子に関心を持つことがあるのだろうか。実際に、親も教師も経済的発展を重視する社会に生きている。親も教師も決して例外ではないのである。それ故に、「豊かな暮らし」を達成することを第一義で、仕事の忙しさに無意識に追われてしまう。その上で、子どもの面倒を見るという自分の一番大事な責任を第二義、第三義にする傾向性がある。

だからこそ、「21世紀は生命の世紀」という池田大作の提唱を実現できる大きな力は、親と教師にある。なぜかという、これまで、教育は国家の権力者（例えば、内閣や文部科学省や国会など）が個人の貪りや自国という狭い範囲に基づいて政治や経済の目的を達成するために、手段にして悪利用してきたからである。

その上で、池田大作が提唱した「生命の尊厳」を基調とした教育は、まさに「全体性」「創造性」「国際性」という広い範囲を見据えたものである。それに従って、そういった教育ができる親と教師のあり方はいかにあるべきか、というのが本稿の研究目的である。その前に、これまで子どもの存在を軽視し続けてきた大人たちは、子どもを一人の存在としていかに見るべきか、ということも考えてみたい。

### 3. 研究方法

本稿は、「池田大作の教育思想」というテーマのため、教育に関すること、また子どもと親と教師を対象とすることなどを、池田大作が著わした様々な著作や世界における各界の識者との対談集、詩集や指導集、教育提言や「SGI（創価学会インタナショナル）の日」記念提言などを引用しながらまとめようとする。

具体的に言えば、親と教師は、「21世紀は生命の世紀」を具現化するという使命において、いかに自分に置かれている立場から現実の様々な厳しさと障害に打ち克っていくかということである。日本の状況を全て把握できないが、本稿は基本的には日本の状況に基づいて述べていきたいと思う。

本拙論の構成については、Ⅰでは、池田大作から見た子どもの存在について、ⅡとⅢでは、家庭教育における子育てと教育をいかに実行すればよいかということについて扱うものである。

## Ⅰ. 池田大作の子ども論

大人社会に見捨てられた子どもたちを不憫に思い、そして大人たちが子どもに対する冷淡な扱いを残念だと思う池田大作は、子どもをいかに見ているかについて、このⅠで扱うことにする。

### 1. 子ども観①

#### (1) 子ども白紙説

すべての人間は子どもとして生まれ、子どもとして現れ、子どもであった。それでは、子どもというのは、どんなものなのかをこの項目で述べていきたいと思う。

池田大作はトインビーとの対談の中で、次のように述べている。

「子どもはいわば“純白の布地”であり、そこには無限の可能性が秘められている」<sup>3</sup>

つまり、子どもというのは何も書かれていない一枚の白紙のようである。それゆえに、子どもは、人間が想像する以上に計り知れない能力が生命に秘めているという存在である。

イギリスの哲学者であり経験主義者でもあるジョン・ロックは、次のように述べている。

「そこでわれわれは精神を、いわば、すべての文字の書いてない、いかなる観念も持たない白紙（white paper）であると考えよう。このような精神はどのようにして観念を具えるようになるのであろうか。忙しく動く限りない人間の空想力がほとんど無限の変化をもって心に描くあの莫大な貯蔵を、精神はそこから得るのであろうか。心はどこから推論と知識のすべての材料を得るのであろうか。このような問いに対して、私は一語で経験（experience）からであると答える。

われわれのすべての知識は経験に基づくのであり、知識は結局経験から引き出されるのである」<sup>4</sup>

このように、池田大作は一人の日蓮仏法の信仰者であり、ロックはキリスト教徒であるという別宗教を信仰しているにも関わらず、二人が持つ子ども観は共通している点があると言ってもいいだろう。

なぜ共通しているかという、池田大作が常に「あらゆる生命は尊い」という日蓮仏法の生命論に基づいて物事を解釈するのは、いずこの国の民族にとって納得できる論理だからである。いわゆる、池田大作は世界的智者であると言っても過言ではないのである。

## (2) 桜梅桃李

前項では、すべての子どもは生まれながら白紙であることを紹介してきた。そう言っても、すべての子どもは同じ個性を持っているか。それについて、本項で述べていきたい。

池田大作は、次のように述べている。

「子どもというのは、一人ひとり違う。成長の度合いも、千差万別です。(省略)体の発育や言語の発達が多少、遅れていても、長い目で見てあげたほうがよい場合もある」<sup>5</sup>

つまり、子どもには計り知れない可能性の種を植えられているが、それぞれが自分なりに美しく開花するまでの時期が違うだけである。それぞれ違う個性を持っているために、発達段階においての速さも違ってくるのである。身長や体重や言語という基本的な発達においても個人差がある。それは、成長していく過程につれてその差がだんだん見えてくるのである。ゆえに、子どもを一人前の人間に育てるまでに信じて見守っていかなければならないである。

日蓮は人間のそれぞれに秘めている美しさについて、次のように教えている。

「桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作三身と開見すれば是れ即ち量の義なり」<sup>6</sup>

それゆえに、大人のみならず、子どもも一個の人間だから大人と変わることなくそれぞれが違うのである。

池田大作は次のように述べている。

「子どもたちには、もともと上昇していく力があるのです。本来、持っているのです。“よい子”だとか、“悪い子”だとか決め付けるのではなく、『あなたは、あなたのままでいい』『ありのままでいい』と、子どもたちの存在そのものを認めてあげることです。それでいいのです。大人の側が、寄り添って、ちょっと援助してあげれば、どこか心の深い所で、バランスがとれるのでしよう。子どもの中から、無限の力が湧き上がってくるのです」<sup>7</sup>

それから、トルストイは次のように述べている。

「人はだれでも特定の一つの特質をもっている。つまり人間は善人か悪人かばかか鈍感か精力的かなどのいずれかに分けられる、という考え方は、ごくありふれたひろくおこなわれている迷信の一つである。人間とはそうしたものではない。わたしたちはひとりの人間について、彼は悪人であるときより善人であるときの方が多いとか、ばかであるときよりも利口であるときの方が多いとか、鈍感であるときよりも精力的であるときの方が多いというふうには言うことはできる。もちろんその逆の場合についても言うことができる。しかしわたしたちが、ひとりの人間について彼は善人であるとか利口だとか、そしてもうひとりの人間について彼は悪人だとかばかだとか言

えば、それはまちがいだろう。だのに、わたしたちはつねにこういうふう人間を分類する。これは正しくない。人間は川のようなものである。水はどこの川の水もおなじもので、どこでも変わらない。しかし川そのものにはちいさいのもあれば大きいのもあり、流れの速いのもあればゆるやかなのもあり、水の清らかなのもあれば濁ったのもあり、水の冷たいのもあれば暖かいのもある。人間もこれとおなじである。つまり人はだれでも人間のあらゆる特質の萌芽をもっていて、あるときにはある特質が、あるときには別の特質があらわれて、実際にはおなじひとりの人間でありながらも、まったく打って変わった人間になる場合が多い」<sup>8</sup>

### (3) 幼児時代

池田大作は、かつて「幼児の心の世界は、実に純粹です」<sup>9</sup>と述べている。

そして、ロシア国際児童基金協会総裁として勤めているリハーノフとの『子どもの世界——青少年に贈る哲学』という対談集の中で、第1章のタイトルは次のように書いてある。

「幼年時代、それは人生のまえぶれではなく、人生そのものだ」<sup>10</sup>

トインビーは池田大作との対談集の中で、次のように述べている。

「人格は人生のあらゆる段階で変えていくことはできますが、その決定的な形成がなされるのは五歳までであり、この人格形成期にあつて、子供が家庭で母親に育てられている場合、その環境的要因として主に寄与するのは母親の教育による影響だということは、大方の意見の一致するところようです」<sup>11</sup>

要するに、人間の人格形成をするために大きく影響されるのは5歳までの段階である。その成長期間中で母親の下での家庭教育は最も大事である。だから、人間の決定期という幼児時代の教育を粗末にしてはならないという意味が伝わってきたのではないだろうか。

「世界で初めて、幼稚園をつくったドイツの教育家・フレーベルは言いました。『子どもは5歳までにその一生に学ぶすべてを学び終える』と」<sup>12</sup>

また、続けて次のように述べる。

「幼稚園といのは、子どもが初めて、家族とは別の人々といっしょに生活するところです。『社会と初めて出あう場所』と言ってもよい。お友だちといっしょに遊んだり、時にはケンカしたり、みんなで一つのことに取り組んだり——この期間に、いかに他の人々といっしょに生きる『社会性』を身につけることができるか。(省略) 幼稚園の時から、他人のことを気遣う心を養っていくことは、長じて健全な人間関係を築いていけるようになるでしょう」<sup>13</sup>

池田大作の次のような言葉を紹介して、本項を結びたい。

「幼児こそ、まさしく国際人の資格である『差別なき心』の体現者といえるでしょう。人間は長ずるにしたがつて、民族や宗教の差異にこだわったり、富や権勢を鼻にかけたりして、その心が曇らされ、差別なき心のつき合いが難しくなってきます」<sup>14</sup>

## 2. 子ども観②

### (1) 人間観

池田大作は、子どもは「無限の可能性」を生命の中に秘めていて、また「未来からの使者」、あるいは「未来の宝」であると述べている。池田大作の見解について、これまで論じてきた様々な教育説と一致していると証明することができた。その一方、池田大作の思想を論じるためには、池田大作が生涯を捧げる日蓮仏法の教えを欠かして述べることはできないと言っても過言ではない。

池田大作は、次のように述べている。

「人間をはじめとするすべての生命体は、つねに、不完全であり、成長し、変化しつづけるものだが、しかも、どの一瞬をとってみても、一個の生命として完成しているといえるでしょう」<sup>15</sup>

要するに、池田大作は子どもを一個の人格として褒め称えたり、尊敬したりするが、決して子どもは大人と同じ人間を見ることではないと言えよう。それは、子どもは瞬間瞬間自分の「学ぼう」「伸びよう」<sup>16</sup>という旺盛な好奇心を持っているので、環境に与えられた物事を吸収していくのである。まさに、子どもの仕事はいつまでもどこまでも学ぶことであると言ってよい。また、子どもの心が傷つかなないように親の教育の配慮に関して、次のように述べている。

「幼い生命に心の傷を残さないためには、よほどの配慮が必要であることがわかるね。その子供の心性をよくみきわめて、賢明な形で、欲望や感情をコントロールすることが肝要です。そのためにも、心の深層を、さらに深く知る必要があるのではないだろうか。生命の全貌がわからなければ、どのようにコントロールしていけば、立派な人間性を養えるのかもわからないでしょう」<sup>17</sup>

つまり、池田大作は「人間の子どもは一人前の人間ではない」と述べていると言っても過言ではない。

そして、池田大作は、続けて、心について次のように述べている。

「ところで、心の世界は、理性や良心や欲望などに限定されるものではない。その底流には、さらに一段も二段も深い生命の法が、実在しているのではないかと考えられる。そうでなければ、理性や良心や衝動、また、感動などの実在とその活動は、たんなる偶然になってしまう。また、これらを生みだした根源の実体は、永遠の闇にほうむられてしまうことにもなりかねない」<sup>18</sup>

### (2) 少年の善悪の問題

子どもと社会の関係について、池田大作は、次のように述べている。

「子どもは、“時代の縮図”であり、“社会の未来を映す鏡”であります。その鏡が、暗い闇に覆われて曇ったままでは、明るい希望の未来など期待しうべくもありません」<sup>19</sup>

つまり、子どもとは、どんな次代を迎えるかという現代の象徴であり、また社会の状況の投影である。

ルソーの見解を次のように紹介している。

『最初の自然の欲望は常に善である』『悪は生まれたときから人間の心にあるものではない。天から授かったとみなされなければならない唯一の人間の悩みは自己愛である』<sup>20</sup>

仏法は善悪をどのように見ているかを『やさしい教学②』、は次のように述べている。

「すべてを『運命』『宿業』のせいにしてしまうという考え方は、人生における苦悩の深さ、自分の人生でありながら、自分ではどうにもならないことへの、やり切れない思いが生み出した“逃避策”といえるかもしれません。

仏法ではそうした人生の苦悩をどのように解明しているのでしょうか。——結論から言えば、苦しみのどん底に追いやる出来事などの『原因(因)』は、神などによるのではなく、ほからなぬ苦しんでいる人自身が作り出したものであると説いています<sup>21</sup>

それに加えて、池田大作は、仏法が説いている『十界論』について、次のように述べている。

「仏法では、人間の——人間には限らないが——生命状態を、基本的に10の範疇に分類する。

悪い方から言うと、第一に『地獄界』とは、怒りや憎しみにとらわれ、苦しみに押しつぶされて身動きのとれない、最悪の苦悩、煩悶の境地。

第二に『餓鬼界』とは、とどまるところを知らない激しい欲望にがんじがらめにされている境地。

第三に『畜生界』とは、理性も意志も動かさず、動物的本能のみにつき動かされている愚かな境地。

第四に『修羅界』とは、強い者にへつらい、他人に勝ろうとする自己中心的な境地。

第五に『人界』とは、平静に物事を判断できる生命状態。

第六に『天界』とは、喜びに満ちた生命状態。

第七に『声聞界』とは、世の無常の理を知り、煩悩を断尽していこうとする境地。

第八に『縁覚界』とは、自然現象などを縁として、真理に目覚め、覚りに入る境地。

第九に『菩薩界』とは、民衆を救済しようと利他の実践に出ていく境地。

第十に『仏界』とは、方法に通達した覚者の円満自在な境地、と言う。

簡単に申し上げるが、この序列の最初の方であればあるほど“極悪”に近く、最後の『仏界』に近づくほどに“極善”に接近してくる。

もとより、この10の範疇は固定的なものではなく、一瞬一瞬、千変万化して揺れ動くのが、人間の心というものである。

大切なことは、その揺れ動く心の基底部が、どこにおかれているかである<sup>22</sup>

さらに、池田大作は、次のように述べている。

「先ほど、道徳的人間、非道徳的人間ということを言われましたが、私は、先天的、あるいは先験的に、人間をそのように区分けすることは、できないと思います。

人間は、善性と悪魔性を併せもつ存在であって、『縁』によって善性が顕在化してくる場合もあれば、逆に悪魔性が、わがもの顔に跳梁跋扈する場合もあります。

その際、仏教的な観点から一番大事なことは、この『縁』が、外からばかり与えられるのではな

い、ということです」<sup>23</sup>

このように、池田大作が述べたように、人間はある『縁』によって自分の善性と悪魔性を現すことから、経験を積むことによって成長していくことができるのだと言えるだろう。

最後に、次のような池田大作の言葉を紹介して、本項をしめくりたい。

「現代の諸問題の解決も、結局は、『人間』をつく以外にない。その根本が『教育』です」<sup>24</sup>

### (3) 子どもの非行について

人間は本来、善性と悪魔性と一緒を持ち合わせて生まれてきたので、善とも悪とも言えない存在である。そして、ある「縁」によってその善、また悪を何らかの形で現すのだと、池田大作は述べていた。子どもは本来、善であると前項で確認した。それでは、子どもは一体どんな「縁」によって暴力やいじめや犯罪という悪の方向に走ってしまうのかを、この項で述べていくことにする。

ニールは犯罪を犯した子どもの心理について、次のように述べている。

「犯罪は明かに憎悪の現れである。そこで子供の犯罪を研究することは、なにゆえ子供が憎悪に至るかを研究せねばならぬことになる。それは傷けられた自我の問題である。子供は本来利己主義者である。この事実を否定することができない。子供はそれ以上に出ていないものである。子供は人を愛することができない。子供はただ愛されることを求めるのみである、パリーの『泣きむしトミー』は永遠の子供である。どの子供もトミーのように『僕を見てよう！ばかじゃないよう！』と言って泣く。自我が満足せられたとき、そこに善と呼ばれるものがある。自我がおしつぶされたとき、罪と呼ばれるものがある。犯罪者は社会に向かって復讐する」<sup>25</sup>

そして、さらにニールは述べる。

「犯罪は最初は家庭の事件、つぎは社会の事件というようになる。(省略) 殺意の背後には多くは権力と嫉妬とがある。いかなる子供も権力には抗しえない。(省略) シュテケルは、『憎は力への意志である、愛は服従への意志である。』と言っている。しかし子供においては、力への意志は賞められたい、愛せられたいという意志である。子供は賞讃や注意をえようとしてつとめるものである。だからわれわれは内向的の子供——社会的才能のない臆病な子供——において犯罪的意思を見る」<sup>26</sup>

さらに、子どもを犯罪を止めさせる方法について、次のように述べている。

「私は心理学的方法によって、犯罪的な空想の子供をなおすのだと、ときどきうぬぼれることがある。しかしほんとうに子供をよくするためには、子供を信ずるだけではいけない、愛するまでにゆかなければならぬものと思う。(省略) 私が愛していると子供が感ずるのは、私が子供の自我を尊重するためである」<sup>27</sup>

つまり、ニールは子どもへの本当の思いとは、ただ彼を信じるだけではならず、愛するまでいかなければならないという点にほかならない。換言すれば、子どもの自我を尊敬していくということであ

る。

一方、池田大作は、次のように述べている。

「暴力を振るう子の多くは、『誰も自分のことを大切にしてくれない』という意識をもっていると  
言われる。子どもの心を健全に育むためには、自分の存在が、ありのままに受け入れられ、包容  
される必要がある。そうすれば、自己という存在のかけがえのなさを実感することができ、自  
身を大切にしようという心が生まれてくる。それは同時に、他者に対する信頼と尊敬の源になる  
ものだ。子どもが本能的に求めているのは、愛されることである。家庭こそ、子どもを守り、正  
しく育てていく“安心の港”にならなければならない」<sup>28</sup>

つまり、悪の方向に行動を取る子どもは、自分のことを信じてくれる人がいないからだと言ってい  
る。そして、安心できる時間と空間を与えなければならないのである。この「信頼関係」という根本  
的な条件を整えるならば、子どもは自分の存在を大切にできると同時に、また他人に対しても同じよ  
うに信じてあげたり、お互いを尊敬し合ったりすることができるに違いない。

一方、大人と子どもの間における信頼の根底には、「愛」という条件がなければならないのである。  
そこで、子どもの非行と愛との関係について論じていきたい。ニールは、次のように述べている。

「愛と憎とは反対ではない、愛の反対は無関心である。憎は愛の変形であり反抗によって示され  
た楯の一面である」<sup>29</sup>

つまり、子どもが憎しみを感じるのは、彼らに対する関心を失った時である。憎しみを抱いたら、  
何らかの反抗の形を行動に移していく。それ故に、子どもが関心を失うということは、大人に対して  
安心を感じなくなったと言っても過言ではない。

池田大作は次のように述べている。

「子ども時代に受けた心の傷は、簡単には消えないものですが、その傷を癒すのも、人間のいた  
わりであり、愛情です」<sup>30</sup>

池田大作の言葉と同じように、ニールは次のように述べている。

「多くの親たちは、子どもを罰することによって、愛が憎に変わることを知らない。子どもの持  
っている憎しみの心はなかなか見えない。子どもを打ったあとで、子どもがおとなしくなったと  
思う母親は、打たれたために起ってきた憎しみを子どもはすぐに抑圧してしまっているのだとい  
うことを少しも知らないのだ。しかし抑圧された感情というのは消えたのではない。それは単に  
眠っているにすぎないのである」<sup>31</sup>

要するに、子どもの態度に対して持つ不満を解消するために、鞭で子どもを抑圧したと考えられる  
だろう。

## II. 池田大作の母親論

IIとIIIでは何を論じたいのかといえ、自分の宝である子どもの成長に対して、一母親、または一父親として、いかにして子どもの模範となるという人間になるか、ということについてである。

### 1. 母性

池田大作は、かつて戸田城聖の次のような言葉を紹介している。

『子どもの教育は、女親に任せた方がよい。子どもは、母親からどんなに厳しく叱られても、ひねくれないが、父親がうるさくいうと、必ず、成長を曲げてしまう』という私の恩師の教訓によるからである」<sup>32</sup>

なぜ戸田城聖は、子どもの教育は父親よりも母親に託した方がいいと言われたかについて、池田大作は、次のように考えた。

「このさりげない教訓を実践してきた成果は、まずまず成功していると思う。腕白ぞろいには違いないが、母親のいいつけはよく守るし、ひねくれたところは少しもない。幼児教育について、主として母親の立場を色々と述べてしまった。それは、人間形成の最も重要な鍵を、母親が握っていると思うからである」<sup>33</sup>

それに関する次のようなルソーの考え方を紹介する。

「ルソーは『エミール』の第一巻の初めに、子供のために母親の決定的な役割をあげ、『最初の教育が最も重要であり、疑いもなく女性がこの教育に適する』と言っている」<sup>34</sup>

心理学的な観念から様々な「母性」についての観念を考えていきたい。最初に、「母性愛」について述べていきたい。

心理学では、「母性愛」(maternal love)を、「母親による育児行動、あるいは母親の子どもに対する態度の底にあると仮定されている情緒もしくは情操」<sup>35</sup>と定義している。より端的に言うならば、母性愛とは、子どもに対する純正な母としての感情ということになるのだろう。<sup>36</sup>

そして、精神分析学派を代表する学者の一人であったドイッチェによれば、「母性(愛)」とは、①社会的、生理学的、感情的な統一体としての、母の子に対する関係を示したものであり、②受胎と共に始まり、その後の出産や養育といった生理的過程を通じて続くものである、とされる。要するに、「母性愛」は、子どもに対する積極的で、かつ直接的な愛情の表現であり、その体質を一言で表現するならば、「柔和であること」だという。いわゆる「母親らしさ」とは、こうした母性的感情に裏打ちされた特性に他ならないと、ドイッチェは言うのである。そうした意味では、母性愛や母性的感情は、ドイッチェが指摘している以上に、受胎や出産、授乳活動によって維持されるだけでなく、そうした経験によって、より一層、増幅することが予想される。<sup>37</sup>

「母性愛」について、池田大作は次のように述べている。

「濁らない玲瓏な母性愛、率直自然な母性愛は慈悲の大河といってもよいかも知れない。男にはない女性の特権は、母性愛である」<sup>38</sup>

フレーベルの「乳のみ子は母の乳房から世界を吸っている」<sup>39</sup>との有名な言葉を付け加えたい。つまり、子どもを産み、授乳する母親が子どもの最初に出会う人間であり、両者の関係、すなわち母子関係があらゆる教育活動の出発点ということになる。換言すれば、教育の第一歩を踏み出すことをのべたものである。<sup>40</sup>

池田大作は「子どもを育てることは、母性の使命であり、天職である」<sup>41</sup>と言っている。また、池田大作は『母』という曲の作詞の中で、「母」なる存在を、「不思議な 豊富な力を持っている」、「還るべき大地」、「強き調和の存在」、「万人の顔の心の故郷」「海より広い（省略）あなたの愛」と讃えている。この表現には、フレーベルの想いと一致していると言えないだろうか。

## 2. 母親について

池田大作は、母親の姿について次のようにほめたたえている。

「母親の存在とは、何かと考えると——家における太陽であり、大地だと思う。常に人間の生命をはぐくむ力、これほど偉大な、尊い力はどこにもない。まさに、母親こそ、家庭の中核であり、主役であり、まことの女王なのだ」<sup>42</sup>

つまり、母親は太陽であり大地であるという池田大作の言葉にある深みを、家庭教育における重要性を考えながら、母親像についてこの項で論じていきたい。

まず、池田大作が述べた「母親の条件」についての一節から始めたい。

「女性が女性として最高の力を出すとき、女性の本領が発揮されるときとは、母となった人が、新しい生命を全魂かたむけて慈しみ、はぐくむ時であると思う。また、女性としての本当の美しさを全身にたたえるのも、母となった時ではないだろうか」<sup>43</sup>

トルストイの言葉と一致すると言っても過言ではない。

「理想的な女性とは、わたしの意見によるならば、彼女の生きている時代の最高の世界観を見つけて、不可抗力的に女性にさづけられているところの天職——すなわちどっさりと子どもを生んで、自分の身につけた世界観に従って、その子どもたちを人類のために働く能力をもつ人間に育てあげる事業——に身をささげている女性である」（一八八六年「＜女性論＞に対する駁」より）<sup>44</sup>

このように、トルストイは、母親になる女性は理想的な女性だと言っている。つまり、子どもを産むだけではなく、子どもを人類に貢献できる人材に育てていくことに苦勞する女性に他ならない。

一方、母親の偉大さについて述べた池田大作の言葉を続いて紹介したい。

「一番、身近にいる母親は、子どもにとって『最初の教師』です。ユダヤの諺には、『母親の教育は、100人の教師に勝る』とあります。子どもが安心して成長していけるよう、智慧を働かせ、大きく包んでいる母親の愛情は、人生の重大な岐路で生きるものです。人間愛は人間愛の中でこ

そ育まれ、家族は人間愛を呼吸して成長していくものです」<sup>45</sup>

つまり、生まれた子どもの最初の教師は、母親に他ならない。

池田大作は、次のように述べている。

「幼児にとって、母親の存在はあまりにも大きい。全て、母親のしぐさを真似ていくといっても過言ではない。昔から『三つ児の魂百まで』ということが言われてきた。確かに、三歳ぐらいいまでに子どものおよその性格や、その後の潜在的な傾向性は決まってしまうのであろう。三歳ぐらいいまでは、幼児は、母親学校で、様々なことを学ぶのである。生まれたばかりの幼児は、いわば白紙である。内にあらゆる可能性を秘めた純白な布地である。それに、どのようなスタンプを押すかは、まったく母親の『人間』にかかっている」<sup>46</sup>

さらに、池田大作は、母親を太陽に例え、笑顔について、次のようにほめたたえる。

「母は『太陽』である。その朗らかな笑いは、全ての人々に安心を与え、心の闇を照らす。(省略) 家族の中の、母の笑顔の光。生命の輝き——ささいなことかもしれないが、それこそが、子どもたちの魂を照らし、未来を明るく輝かせていくのではないだろうか」<sup>47</sup>

このように、母親の明朗な笑いは、太陽のように暗闇を明かし照らして、子どもを安心させて希望を与える、かけがえのない魅力なのである。

現実的に、池田大作が述べているように「女性の一生において、子を産み、育てる母親の仕事ほど、苦勞の多いものはあるまい」<sup>48</sup>、母親の事業とは大変なのである。

最後に、母子の美しい関係についての池田大作の言葉を紹介して、本項を結び付けたい。

「子どもは、いつも母親の方を向いている。母は太陽。母は大海。母は春風。母はひまわり。見方を変えれば、お母さんを見つめる、子どもの明るい笑顔もまた、ひまわりのように見える。あたかも、太陽を見つめる、ひまわりのように。『ひまわり』という名前の由来は、花が太陽の動きについて回ると思われていたからのようです。実際に花が咲いてからは、そういうことはないようです。たしかにその姿は、いつも太陽のほうへ、太陽のほうへと向かっているように見えます。同じように、子どもはいつも、お母さんという太陽に向かっているのです。お母さんも、子どもとしっかり向き合うことです」<sup>49</sup>

つまり、母親は自然にある要素の、広さや美しさによくたとえられていると言ってよいだろう。要するに、母親は全ての人たちを包んでいく心の余裕を持っているのである。

### 3. 母親の愛情の変質について

池田大作は、女性が豊かな愛情を秘めていること対して、次のように述べている。

「ドイツの詩人、シルレルは『真の愛情を知る者は女性である』との至言を残していますが、愛による幸せの道を開く主体者は、女性であり、妻であり、母であるとの真理を動かすことはできないでしょう。それにしても、このような女性の愛も、ともすれば自己愛に変質し、エゴのとり

こになりがちなことも、決して否定はできないと思うのです」<sup>50</sup>

一方、心理的な側面からみれば、池田大作は、次のように述べている。

「深層心理学などで分析されている通り、母性には、子どもを産み、育むという特性がある一方、子どもをいつまでも自分のものとし、呑み込んでしまうような一面があるにも事実だ。母の愛は深い。しかし『盲愛』は子どもを滅ぼしてしまうことすらある。『若ものたちの告白』という著作の中で、子どもに対する両親の“破壊的な愛情”について述べておられる。現代社会において、母性というものが、あるいは歪み、あるいは肥大化し、あるいは欠落したというように、正常なあり方から逸脱してしまっている傾向がある」<sup>51</sup>

池田大作の次の言葉が当てはまるのではないだろうか。

「日本の大人たちは、概して、その点を考え違いしているようである。『どうせ子供だから』とあまり意に介さなかったり、或は、自由放任でいたり、逆に子どもべったりでいることがよいように思ったりするきらいがある。これは結局、幼児を軽く考えていることなのだ。幼児を馬鹿にしたら大変である」<sup>52</sup>

続けて、以下のように述べた。

「あまりにも幼児期の子どものしつけに対し、無関心でありすぎるのではなからうか。幼児は全く未熟なものの、言っても分からないもの、無力無能なものとして、軽く考えてきたようである。確かに、大人の目から見ればそうかもしれない。しかし、子どもの将来を考え、子どもの世界に入って見直した時に、それでは決して済まされないのである」<sup>53</sup>

その一方、エレン・ケイは、次のように述べている。

「過剰な優しさは実に見事な花を咲かせるが、厳格さのように植物を強くは育てない。厳格さは強いものを優先させて美の感覚を鈍化させる。ここで適当な程よさを発見することが教育者の任務であり、また名誉である」<sup>54</sup>

このような母子関係に対して、池田大作が信仰している日蓮は、次のように教えている。

『人のものををし（教）ふると申すは車のおも（重）けれども油をぬりてまわり・ふね（船）を水にうかべてゆ（往）きややきやうにをしへ候なり』（「上野殿御返事」）<sup>55</sup>

この日蓮の言葉に対して、池田大作は、次のように述べている。

「やはり教育の根本は、子供が『人生の道』また『人生の航路』を、立派に一人立ちして進んでいけるような環境づくりをすることではないでしょうか。その最大の教師は母親である」<sup>56</sup>

つまり、子どもを社会に送り出す前に、一人前の人間に育てることが教育の目的なのである。いわゆる、子どもを自立させるということである。池田大作は、次のように述べている。

「こどもが可愛いあまり、溺愛することは、大人にとって一番やさしいことですが、こどもは必ずしもそれを望んでいるわけではありません。溺愛はこどもを大人の愛玩物としてしまうだけ、こどもにとってこれほど迷惑なこともなければ、不本意なこともない。溺愛という大人のエゴイズ

ムの犠牲になるのは、こどもは余りにも尊すぎる存在です」<sup>57</sup>

#### 4. 「人間として生きる」良い母親について

池田大作は、次のように述べている。

「昔なら知らず、今の時代に家庭にだけ閉じこもっていたとすると、変貌の激しい現代では人間としての成長はまったくなくなり、社会でも家庭のなかでも置きざりにされて、その主婦の人生は不幸に彩られていくだろう。主人に相手にされず、子供たちに馬鹿にされて、身の置きどころもない母親というものが出来上がるのだ。職業に限らない、婦人はすすんで社会に役立つ運動に参加し、社会的な連帯をつねにもち、人間的な成長を心がけなくてはならない。そういう時代になってしまっているのである。婦人もまさに社会の必要な構成員であるからである」<sup>58</sup>

周知のように、女性の中には歴史的に刻んだ有名な平和運動を起こして女性の自由と権利を尊重するという結果をもたらした人物もいる。例えば、「アメリカ公民権運動の母」として知られるローザ・パークスや、ケニアの環境運動家でノーベル平和賞受賞者のワンガリー・マータイや、平和のために一生を捧げてきた学者であり活動家であるエリス・ボールディングや、未来学者のヘイゼル・ヘンダーソンなどがある。そして女性の力を活用することを求めて讃嘆する数知らずの声が高まってきた。これからも、どんどん高まっていくと言っても過言ではないだろう。

池田大作は、次のように言っている。

「私たちは、人の幸福まで感られるような自己を築き、できるだけ、多くの不幸や悲惨を救いたいものだ。(省略) じつは、その原動力となる力は、女性が持っているともいえる。それは、決して自己を犠牲にすることではない。(省略) しょせん、それは女性の豊かな愛情の發揮に負うものである。愛情こそ、人生にうるおいをもたらし、多くの人の魂を揺り動かすものだ。(省略) だが、その愛も、わが肉親、わが子への愛情のみであっては、まだ狭い範囲のものといわざると得ない。わが子同様にすべての人を愛することができれば、実に偉大なことではないだろうか」<sup>59</sup>

さらに、次のような言葉を紹介したい。

「女性には、心の繊細な変化に対して鋭敏であるという特性、しかも、献身的な愛情を捧げるという特質があるからである。子どもは、このような献身的な愛情をもって接してくれる母親の教えやしつけはもちろんのこと、何げない振る舞いから感情に至るまで、全体像をそのまま敏感に吸収して、いつのまにか一個の人間としての全てを備え、人間文化の本質を受け継いでいく。昔から、日本では子どもは母親の鏡であるといわれてきたが、一端映った映像は容易には消えず、生涯にわたって残っている。社会的機関によって、いかに知能の教育を行い、知識を詰め込んだとしても、やはり母親と家庭がもたらす全てを与えることはできないでしょう」<sup>60</sup>

すなわち、母親の子どもに与える教育のすべては、机上の勉強を偏重する学校教育が子どもに与えるはずがないのである。

総じて、社会に出て一所懸命に働く母親の姿は自然に子どもが見習っていくのである。これについて、池田大作は、次のように述べている。

「母親は、子どもにとって、人間としての先輩であり、手本であり、鏡であるということが出来る。子どもは、母親の姿を通して『人間としてのあり方』を学びとっていくものである」<sup>61</sup>

その他に、母子のあるべき関係について、池田大作は、次のように述べている。

「では、親と子供は、現代にあってはどうかあるべきか——となるが、親は子供のよき友達であれかしと私は希う。子供に愛情を持たぬ親はないが、もう一つ、友情を持ってとりたいのだ」<sup>62</sup>

次の池田大作の言葉を紹介して、本項を結びたい。

「21世紀は『女性の世紀』です。その主役こそ、お母さん方です。一家にあっては、だれよりも優しく、だれよりも強い。そして社会にあっては、ウソや悪を許さない『正義の心』と、不幸な人を放ってはおかない『慈悲の心』を燃やす『太陽』のごとき存在——。私は、そんな崇高なお母さんを讃える思いで、随想にこう書きました。

母は、人間の女王！

いつも、勝利者である。

母は、誰にも負けない。

母は、何ものにも負けない。

それが、真実の母である。

悩みもあるでしょう。苦しいことも多いかもしれない。だが、そこで負けないで、子どもや家族を、そして自分に縁した人びとをすべて『幸福の大道』へと導いていく——これほど尊貴な存在はありません」<sup>63</sup>

### Ⅲ. 池田大作の父親論

#### 1. 父性

池田大作は、次のように述べている。

「父と子の心の絆が、偉大な『平和学の泰斗（大学者）』を育んだとも言える」<sup>64</sup>

鈎治雄は、次のように述べている。

「父性原理には、人を切り捨てる、切断する、できる者とできない者とを立て分けるといった性質がある。これらは、どちらかといえば、父性原理の否定的側面であるといってよい。その一方で、父性原理には、善いことと悪いことを識別する、正義と邪悪を区別する、人を厳しく鍛える、個人の確立をはかる、個人差を認める、個人の能力や責任を重視するといった肯定的側面がある」<sup>65</sup>

家庭において父親の生き方は子どもに対して厳しくて、権力的であり、賞罰する立場に立つのである。それについての例は何かというと、次のように示している。

「たとえば、世のお父さんは、子どもに対して、『子どもなんだから、親の言うことを聞いて当然だ』『子どものくせに理屈を言うな』『子どもというものは、しっかりと勉強するもんだ』といった断定的で、威圧的な言いまわしをすることがよくあります。あるいはまた、『お父さんの言うとおりにしていれば間違いないんだ』『たけし！そんなことをしていたら、大きくなって後悔するぞ』というように、押しつけがましく、説教的な口調も目立つものです。このように、父親という存在は、『批判的な親』という心を前面に打ち出すことによって、子どもとかかわっていかうとする面があります」<sup>66</sup>

精神分析論的に次のように解釈している。

「しかし、その一方でこうした『父親の心』が、適度なかたちで表出するならば、子どもの成長発達にとって、プラスのはたらきをもつことも確かです。交流分析では、『批判的な親』の心のはたらきは、子どもが生きていく上での、道しるべに相当するものであると教えています。尊敬できるお父さんの言葉や振る舞いは、子どもにとっての模範であり、将来の大きな指標となって心に焼きついていくものです。子どもというものは、父親の姿をよきモデルとして自分の中に取り入れ、同一化していこうとする面があります」<sup>67</sup>

その反対に、家庭において「父親の心」を存在しなかったら、どうなるか次のように述べている。

「家庭の中で、こうした『父親の心』がまったく欠如している場合には、子どもの心の中に、善悪の判断に関する能力が育たなかったり、自分の意見や考えを述べる力が身につけにくいといえます。また、お父さんのもつ厳しき、力強さは、ときに、子どもの心のひ弱さを断ち切り、独立心を育てていく上においても不可欠です。このように、『父親の心』は、子どもの成長にとって、重要な役割を担っています」<sup>68</sup>

池田大作は、次のように述べている。

「家庭であれ学校であれ社会であれ、人間の生活が円滑に運営されるためには、必ずルールがあります。『名月を とってこれろと 泣く子かな』の状態を脱し、そのルールにしたがって、どう自分のわがままや欲望をコントロールしていけるかどうか、人間の成熟はかかっています。そのルールを、身をもって教えていく責任は、母親以上に父親の双肩に担われていくでしょう」<sup>69</sup>

さらに、父親の特徴についての池田大作の次の話を紹介して結びたい。

「いざという時には、脇目もふらず、子どものために何でもできるというのが、父親の本当の愛情である。そういう父親を持った子どもは幸せである。何もなく順調な時はいい。子どもを後ろから、温かく見守ってあげていればいい。しかし、子どもが大きな岐路に立った時には、陰に陽に力強く後押ししてあげることが、父親の大切な役割だと思う」<sup>70</sup>

要するに、父親は家庭の中で常に表舞台より、裏舞台の役を演じるのである。

## 2. 父親の権威的な性質について

池田大作は、次のように述べている。

「日本の子どもたちを取り巻く異変——いじめや不登校をはじめ、育ち盛りの子どもたちにあるまじき怠惰や無気力、あるいは常識を逸脱するような凶悪犯罪——。こうした問題の背景の一つとして、『父性』の欠如が指摘されています。ことさらに『父性』というと、近代日本の歩みの中で制度化されてきた家父長制での『強い父』『怖い父』を思い浮かべる方もいるかもしれない。いわゆる『権威主義的な父親像』です」<sup>71</sup>

そして、次のように続ける。

「こうした『強い父親』は、敗戦後、民主主義の名のもとに全否定されました。家父長制を軸とする家族制度こそ、天皇制を支える基盤であるとして、攻撃的となったのです。結果として権威的な父は悪者とされ、『物わりのよい父』『友人のような父』が、子育てにとっての理想とされてきました」<sup>72</sup>

それから、続けて次のように述べている。

「一言で言うと、父親の受難の時代です。自信喪失の時代とも言えるでしょう。この父親の『権威の喪失』こそが、子どもたちの心を無秩序にし、現在のような善悪のけじめをつける感覚もない、また心に張りのない無気力な子どもたちをつくった要因の一つではないでしょうか」<sup>73</sup>

春日キスコは著『父子家庭を生きる』で次のように述べている。

「いま、子どもを持つ男たちの多くは、金を稼いでくることこそ父親の役割として疑わず、仕事にすべてを捧げる人生を送っている。裏返して言えば、妻の心と出会わず、子どものいのちと出会わずにすましているのが現代日本の多くの男たちではないのか。子どもは『食べること』『着ること』『おしゃべりすること』『遊ぶこと』『教えられ、学ぶこと』によってはじめて命を育て、心を培う。子どものいのちを育て、子どもの心を育てることが親の役割だとすれば、子どもを持つ男性のどれほどが<親>として生きることを許されているのだろうか」<sup>74</sup>

また、次のように続けている。

「妻との出会い、子どもとの出会い、人との出会い、それが人間の生を豊かにするものだと思えば、その豊かさを奪われて、貧しい生を生きているのが現代日本の男たちではないのか。そして、そのように貧しく生きることを男たちに強いているのが現代の日本の社会なのではないか」<sup>75</sup>

次のようなトルストイの言葉を付け加えたいと思う。

「炊事や織物や洗濯や子守は、女に限られた仕事であり、男がそんなことをするのはむしろ恥であるという、変な根深い妄見がある。が、恥辱に値するのはその反対の場合である。疲れた、病弱な、妊娠した女が、実力以上に無理して炊事をしたり、洗濯をしたり子守をしたりしているときに、男が、しかもたびたび手がすいているのに、くだらないことに時間を費やしたり、あるいは何もしていなかったりするのこそ、むしろおおいなる恥辱である」<sup>76</sup>

### 3. これからの父親像

池田大作は、次のように述べている。

「“父親失格”以前に“人間失格”です。そのような欠陥人間が新しい家庭を作ったところで、早晚、破綻をきたすであろうことは、目に見えています」<sup>77</sup>

つまり、他人に対して思いやりを持ったり尊重したりという、人間的な振る舞いを持っていない父親は、父親になる資格がないと言っている。

父親としての他の責任について、池田大作は、次のように続けている。

「父親というものは、心理的、精神的にも一家をやしなう存在でなければならない。だからといって、特別にかまえる必要は、もとよりない。毅然としていること自体が、充分にたのもしいように、現実社会のなかに、懸命に生き、働いているその真摯な姿勢は、つくろわずして、家族にたいする豊かな精神的栄養となると思うからだ」<sup>78</sup>

その他には、池田大作は次のようにも述べている。

「さらにいえば、読書なども、仕事上の専門の本ばかりでなく、人間としての豊かさを与えてくれる書に親しむことが大切であろう。一般に、とくに男性は、中年以上になると、ほとんど文学書をよまなくなるといわれる。たしかにフィクションの世界は、現実主義者にとって関心がもてなくなるのは道理ではある。しかし、そうした現実主義こそ、精神の老化と涸渇の徴候であり、養分も味気もない人間になりつつある証拠であることに気づくべきであろう」<sup>79</sup>

「青少年の不良化に関連して、必ず出てくる問題に、父親と子供との心の対話の欠如がある。仕事の鬼となっている親、夢も希望もなく、現実のなかにのめりこんでいる父親に対して、子供は語りかけたくても、そのきっかけがなく、入っていけるゆとりがないのであろう。父親が、心ひろびろとゆとりをもち、また、そのようなゆとりの領域をひろげていけば、それが自然に対話の共通の広場になっていくだろう」<sup>80</sup>

作家の鈴木光司は、次のように述べている。

「日本では、『父親の背中を見て子は育つ』という言葉があるが、背中ばかりを見せていては、父は子供に記憶の庫を残すことはできない。父が子供と正面を向き合い、時には対決するほどの意気込みを見せて始めて、子供の豊かな心が作り上げられていく」<sup>81</sup>

最後に、池田大作は、次の言葉を紹介して締めくくる。

「『母の日』は覚えてくれているが、『父の日』は、およそ無視されるのが常である。人間は、経済的恩恵に対しては、やがて慣れっこになり、感謝の気持ちなど忘れてしまうものだ。むしろ、その少ないことに不満を鳴らすようにさえなる。厄介といえば、人間ぐらい厄介な動物は、なかろう。しかし、精神的恩恵、精神的な豊かさを与えてくれるものに対しては、いつまでも感謝の気持ちを失わないし、敬意を払うものである。父親の“権威”というものがあるとなれば、私は、この精神的な面にこそ求められるべきだと考えたい」<sup>82</sup>

すなわち、母親に感謝することはもちろん大事なのが、父親が毎月家庭に給料を持って帰ることに  
対する感謝も決して忘れてはならないということである。

## おわりに

池田大作の思想は、20世紀の「戦争の文化」から21世紀の「平和の文化」に革命することが理想で  
ある。理想と言えば、ただそれを持っていればできるということではない。

池田大作が何よりも人間の一人一人の生命を尊重していくという「生命の世紀」が「平和の世紀」  
であると言っているとみてもよいだろう。要するに、慈悲の精神である「仏」の生命を見出す可能性  
を基調とした平和の21世紀を築いていくということである。

子どもは社会の「鏡」である。いわば、親の生命の「鏡」と言っても過言ではないのである。それ  
は、白紙のようである子どもは、親や教師の振舞いを真似して成長していくからである。その意味で、  
子どもの態度は、即親の態度である。しかし、科学と技術の進歩によって生活が豊かになる中で、人  
類の幸福がもたらさせる反面、命を落とす様々な事件が起きやすいという傾向がある。

池田大作は、かつて次のように述べている。

「戸田先生は常々、『生命の尊厳』を深く尊重しゆく新しい世代を育成する以外に、戦争の恐怖の  
流転を押しとどめることは絶対にできないと叫び、『教育』の重要性を、声高く強調していた」<sup>83</sup>  
政治や経済だけでは、平和の実現がありえないのである。平和の実現という使命が教育にあると実  
感した池田大作は、確固たる理念と展望に基づいた「二十一世紀は教育」のあり方を打ち出すこと  
こそが肝要<sup>84</sup>であると強調している。また、「教育は、人間のみが為し得る特権である。人間が、人間ら  
しく、真の人間として、善なる使命を悠々と、また堂々と達成しゆく原動力である」<sup>85</sup>と述べている。

社会が教育を根本としたら、政治と経済は自然に人間同士の利害的なものを平和のためのものに変  
更していけるはずなのである。そのために、池田大作は「社会のための教育」を「教育のための社会」  
に変えなければならないと警鐘を鳴らしている。これについて、池田大作は、次のように述べている。

「二十一世紀の『教育のための社会』にあっては、人間が孤立と分断の力に翻弄されることなく、  
人種や国境を超えて結びつきの絆を深め、大自然とも縦横にコミュニケートしながら、共生のハ  
ーモニーを奏でゆく—そうした人格を形成していくことこそ目的であり、第一位の優先順位を与  
えるべきではないでしょうか」<sup>86</sup>

言い換えると、「教育のための社会」を実践すれば、自然に「社会のための教育」になるのである。  
それはなぜかとうと、前者は子ども一人一人の個性を尊重するという自由があるが、苦労がかかる作  
業である。それに対して、後者は一つの制度に定まって大勢の人に従わせるという楽な作業である。

しかしながら、今まで行われている教育は、その二つの視点の逆であり、本末転倒であることはい  
うまでもない。

近頃、子どもによる非行・犯罪の事件の深刻さに対して、諦めて絶望している親は、傍観者になるのではなく、なによりもまず自分自身がその現実立ち向かわなければならないのである。つまり、一人でも多くの子どもを救おうとする一人の教師の決意はどれほど大きな力になることか。

池田大作は「人間は、だれ人たりとも尊厳がある。わが生命の力を、自分自身が、誇り高く発揮していくのだ。決して卑屈にならない。そして、他者に尊厳を見いだし、尊敬していけるかどうか」<sup>87</sup>と示している。そして、「仏法の世界は、『平等大慧』<sup>88</sup>である。特別な人はいない。皆が本来、仏である。皆が尊貴である」<sup>89</sup>と続けて仏法の次元から述べている。

さて、「生命尊厳」といくら強調しても、行動を一步踏み出さなければ観念論と抽象論になってしまうのである。「見る能力は、行う意志と分離されない」とはエマソンの言葉である。それは、なかんずく、一対一の「対話」に他ならないのである。

「すべては、一人との出会いから始まる。一人を大切にすることが、万人への広がりに通じる」<sup>90</sup>という信念を持っている池田大作は、「対話」に尽力し、1600回を超える各国の首脳、識者、文化人と友情を結ぶことができた。

「対話」という地道な行動によって、友情が一波から万波へと広がったのはなぜかについて、前原政之は、次のように述べている。

「池田先生が続けてこられた、優に7000人を超えるという、各国の識者・指導者との対話。それらを支える『対話力』の源もまた、『励ましの力』なのだと思う。立て板に水の弁舌を披露することが『対話力』なのではない。真の『対話力』は、その対話でどれだけ相手を鼓舞できるかによってこそ測られる。先生は、対話相手の胸襟を開き、励ます達人なのである」<sup>91</sup>

つまり、池田大作は苦しんでいる相手の気持ちを頭で分かるのではなく、生命で感じ取ったのである。なぜかという、池田大作が少年時代から戦争の残酷さと悲惨さを体験したことはもちろん、師匠である戸田城聖からの影響も大きかったのである。

「励まし」の大切さの意義について、池田大作は、次のように述べている。

「ともあれ、励ますことだ。声をかけることだ。人生、励ましがあれば、どれほど多くの人が立ち上がっていけるか。励ましを贈るのが、本当の指導者である。励ましがなくなり、理詰めだけ、権威的な押しつけだけでは、人間の世界ではなくなる。人間はモノではない。励ましがあってこそ、人は動く。理論では動かない。励ます人は、大勢の人を味方にする。励まさない人は利己主義である。無慈悲である。横着である」<sup>92</sup>

つまり、他人を励ますことができる人は、その相手の立場に立って気持ちを思うことができる人である。

池田大作は、次のように述べている。

『マス（集団）』ではない。『一人』が大事である。一人ひとりが輝かなければ、本当の人間賛歌の社会は築けない。中国の周恩来総理は言われた。『われわれの中に少しでもおごり高ぶったり、

自惚れたりするところがあれば、これは絶対に許すことはできない』<sup>93</sup>  
その中で、あくまですべては、一対一の「誠実」な対話と交流から始まる。

## [注]

- 1 ①生命の尊厳、②人格の尊重、③友情の深さ・一生涯の友情、④暴力の否定、⑤知的・知性的人生たれ  
『関西創価キャンパスガイド』、関西創価中学校・高等学校、2006年9月8日
- 2 例えば、次のような事件があった。
  - ①愛知県西尾市中学生いじめ自殺事件とは、1994年に愛知県西尾市で起きた男子中学生の自殺事件である  
(<http://www.ijime.bizshin.com/jiken/index.html>)
  - ②新潟県神林村男子中学生自殺事件；2006年に神林村立平林中学校において、ズボンが脱がされた少年がその後自殺した事件である (<http://www.ijime.bizshin.com/jiken/index.html>)
  - ③会津若松母親殺害事件；2007年5月15日に福島県会津若松市に住む高校三年生の少年が、母親である女性を殺害した殺人事件 (<http://www.news.janjan.jp/living/0705/0705205823/1.php>)
- 3 アーノルド・J・トインビー／池田大作、『二十一世紀への対話（上）』、文藝春秋、1975年3月20日、217<sup>㊦</sup>
- 4 Essay concerning Human Understanding, II i, 2  
岩田朝一『ロックの教育思想』、学苑社、1983年7月15日、15<sup>㊦</sup>
- 5 池田大作『「教育の世紀」へ』、第三文明社、2003年8月12日、23<sup>㊦</sup>
- 6 御書、784<sup>㊦</sup>  
聖教新聞社教学部解説部、『やさしい教学②』、聖教新聞社、1994年11月18日、161<sup>㊦</sup>
- 7 池田大作『「教育の世紀」へ』、第三文明社、2003年8月12日、34<sup>㊦</sup>
- 8 1899年「復活」第一部・第59章より  
西本昭治訳編『愛と生と死くトルストイの言葉』、現代教養文庫、1970年10月30日、65～66<sup>㊦</sup>
- 9 池田大作『「教育の世紀」へ』、第三文明社、2003年8月12日、26<sup>㊦</sup>
- 10 池田大作／A・リハーノフ『子どもの世界——青少年に贈る哲学』、第三文明社、1998年12月10日、11<sup>㊦</sup>
- 11 アーノルドJ・トインビー／池田大作『二十一世紀への対話（上）』、文藝春秋、218<sup>㊦</sup>
- 12 池田大作『母と子の世紀（2）——世界の友と教育を語る』、第三文明社、2001年11月18日、144<sup>㊦</sup>
- 13 同前211～212<sup>㊦</sup>
- 14 池田大作『「教育の世紀」へ』、第三文明社、2003年8月12日、135<sup>㊦</sup>
- 15 池田大作『生命を語る』、潮出版社、1973年3月27日、29<sup>㊦</sup>
- 16 池田大作『「教育の世紀」へ』、第三文明社、2003年8月12日、43<sup>㊦</sup>
- 17 池田大作『生命を語る』、潮出版社、1973年3月27日、47～48<sup>㊦</sup>
- 18 池田大作『生命を語る』、潮出版社、1973年3月27日、48<sup>㊦</sup>
- 19 池田大作『教育力の復権へ内なる「精神性」の輝きを』、21世紀開幕記念「教育提言」、2001年1月9日
- 20 トールビョルン・レングボルン（小野寺信・小野寺百合子訳）『エレンケイ教育学の研究』、玉川大学出版部、1980年1月15日、95<sup>㊦</sup>
- 21 聖教新聞社教学部解説部、『やさしい教学②』、聖教新聞社、1994年11月18日
- 22 池田大作／A・リハーノフ『子どもの世界——青少年に贈る哲学』、第三文明社、1998年12月10日、134～135<sup>㊦</sup>
- 23 永山則夫『無知の涙』、合同出版、1971年、170<sup>㊦</sup>
- 24 池田大作『21世紀の教育と人間を語る』、第三文明社、1997年6月25日、45<sup>㊦</sup>
- 25 A・S・ニール（霜田静志訳）『問題の子供』、講談社、1950年3月15日、202～203<sup>㊦</sup>
- 26 同前、204<sup>㊦</sup>
- 27 同前、206<sup>㊦</sup>
- 28 『ジャパン・タイムズ』紙の2007年2月8日付に掲載された池田大作の平和提言

- 29 A・S・ニイル（霜田静志訳）『人間育成の基礎』、誠信書房、1971年7月20日、381頁
- 30 池田大作『21世紀への母と子を語る（3）』、第三文明社、2000年6月6日、125頁
- 31 同前、382頁
- 32 池田大作『私の人間随想』、祥伝社、1971年9月20日、208頁
- 33 同前、233頁
- 34 トールビョルン・レングボルン（小野寺信・小野寺百合子訳）『エレンケイ教育学の研究』、玉川大学出版部、1982年1月15日、94頁
- 35 三宅和夫他編『教育心理学』
- 36 創価大学通信教育部学会『創立者池田大作先生の思想と哲学』、第三文明社、2007年7月3日、203頁
- 37 創価大学通信教育部学会『創立者池田大作先生の思想と哲学』、第三文明社、2007年7月3日、204頁～205頁
- 38 池田大作『婦人抄』、聖教新聞社、1977年6月6日、198頁
- 39 遠藤邦三他訳著『新教育原理』、19頁
- 40 遠藤邦三他訳著『新教育原理』、19頁。原典はフレーベル、岩崎次郎訳『人間の教育』1、29頁の「乳呑子は、彼を取り巻いている人々の状況を吸い込まないだろうか」。
- 41 池田大作『私の人生随想』、祥伝社、1971年9月20日、234頁
- 42 池田大作『婦人抄』、聖教新聞社、1977年6月6日、199頁
- 43 同前、197頁
- 44 西本昭治編『愛と生と死<トルストイの言葉>』、現代教養文庫、1970年10月30日、80頁
- 45 池田大作『「教育の世紀」へ』、第三文明社、2003年8月12日、27頁
- 46 池田大作『私の人間随想』、祥伝社、1971年9月20日、222～223頁
- 47 池田大作/A・リハーノフ『子どもの世界——青少年に贈る哲学』、第三文明社、1998年12月10日、309～310頁
- 48 池田大作『婦人抄』、聖教新聞社、1977年6月6日、197頁
- 49 池田大作『「教育の世紀」へ』、第三文明社、2003年8月12日、21頁
- 50 池田大作『婦人抄』、聖教新聞社、1977年6月6日、23頁
- 51 池田大作/A・リハーノフ『子どもの世界——青少年に贈る哲学』、第三文明社、1998年12月10日、293頁
- 52 池田大作『婦人抄』、聖教新聞社、1977年6月6日、230頁
- 53 同前、232頁
- 54 トールビョルン・レングボルン著（小野寺信・小野寺百合子訳）『エレンケイ教育の研究』、玉川大学出版部、1982年1月15日、65頁
- 55 堀日享『日蓮大聖人御書全集』、創価学会、2005年6月1日、1574頁
- 56 池田大作『吉川英治「人と世界」』、六興出版、1989年9月7日、83頁
- 57 池田大作『婦人抄』、聖教新聞社、1977年6月6日、100頁
- 58 池田大作『婦人抄』、聖教新聞社、1977年6月6日、111頁
- 59 池田大作『家庭革命』、講談社、1969年9月18日、186～187頁
- 60 アーノルド・J・トインビー/池田大作、『二十一世紀への対話（上）』、文藝春秋、1975年3月20日、219頁
- 61 池田大作著『私の提言』聖教文庫—70、1975年6月30日、37頁
- 62 池田大作『婦人抄』、聖教新聞社、1977年6月6日、113頁
- 63 池田大作『21世紀への母と子を語る（3）』、第三文明社、2000年6月6日、51頁
- 64 池田大作『21世紀の教育と人間を語る』第三文明社、1997年6月25日、93頁
- 65 創価大学通信教育部学会『創立者池田大作先生の思想と哲学』、第三文明社、2007年7月3日、203～204頁
- 66 鈎治雄『親と子の心のふれあい』、第三文明社、1996年4月30日、138～139頁
- 67 同前、140～141頁
- 68 同前、141頁
- 69 池田大作/A・リハーノフ『子どもの世界——青少年に贈る哲学』、第三文明社、1998年12月10日、276頁
- 70 池田大作『21世紀への母と子を語る②』、第三文明社、1999年11月18日、222頁
- 71 池田大作/A・リハーノフ『子どもの世界——青少年に贈る哲学』、第三文明社、1998年12月10日、269頁
- 72 同前、269～270頁
- 73 同前、270頁
- 74 春日キスコ『父子家庭を生きる』、勁草書房、1989年1月20日、「はじめに」
- 75 同前、「はじめに」

- 76 トルストイ『一日一生人生読本4～6月』、社会思想社、1970年9月30日、145頁
- 77 池田大作／A・リハーノフ『子どもの世界——青少年に贈る哲学』、第三文明社、1998年12月10日、285頁
- 78 池田大作『婦人抄』、聖教新聞社、1977年6月6日、122頁
- 79 同前
- 80 同前、122～123頁
- 81 木原武一『父親の研究』、新潮社、1999年4月30日、裏面
- 82 池田大作『婦人抄』、聖教新聞社、1977年6月6日、123～124頁
- 83 池田大作『希望の世紀へ「教育の光」』、鳳書院、2006年2月11日、42頁
- 84 同前、14頁
- 85 同前、42頁
- 86 『婦人部最高協議会での名誉会長のスピーチ④』、聖教新聞掲載、2007年11月27日189頁
- 87 堀日享『日蓮大聖人御書全集』、創価学会、2005年6月1日、413頁
- 88 『婦人部最高協議会での名誉会長のスピーチ④』、聖教新聞掲載、2007年11月27日
- 89 前原政之『論苑「師は励ましの達人！」』、聖教新聞掲載、2007年12月21日
- 90 池田大作『希望の世紀へ「教育の光」』、鳳書院、2006年2月11日、131頁
- 91 前原政之『論苑「師は励ましの達人！」』、聖教新聞掲載、2007年12月21日
- 92 池田大作『希望の世紀へ「教育の光」』、鳳書院、2006年2月11日、131頁
- 93 『周恩来選集』上巻、森下修一編訳、中国書店)  
池田大作『希望の世紀へ「教育の光」』、鳳書院、2006年2月11日、144頁